



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人類学とオリンピック : アイヌと1904年セントルイス・オリンピック大会
Author(s)	宮武, 公夫
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 108, 1-22
Issue Date	2002-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34033
Type	departmental bulletin paper
File Information	108_PL1-22.pdf



人類学とオリンピック —— アイヌと1904年セントルイス・オリンピック大会 ——

宮 武 公 夫

はじめに

近代という時代は、かつてない繁栄をもたらした新たな時代と、その未来の姿を描くために、多くの装置を発明した。その中でもっとも大規模なものとして、万国博覧会と近代オリンピックが挙げられるだろう。一九世紀の国民国家と消費社会によって生みだされたこれらのメガ・イベントは、やがて産業資本主義が依拠する国家と社会のありかたを表象し、国民となった人々を教育、啓蒙する装置として発展してきた。ベネディクトの『世界博覧会の人類学』によれば、世界博覧会は、資源と市場を求めて世界中に広がった産業資本主義が、商品だけでなく、国家と科学と教育によって生み出される、都市社会と人々の生活についての理想を売るものだった。

「大博覧会は産業資本主義の一つの現象だった。大量生産者は製品を売るために世界規模の大衆市場を希求し、万国博覧会は数百万人もの潜在的消費者のための商品ケースを供給した。しかし、博覧会は単に商品を買っていたのではなく、理想を売っていたのだ。それらは、国家関係について、教育の拡大について、科学の進歩について、都市の形態について、自分たちの生活について、そして、社会における芸術の在り方についての理想だった。それらは、秩序づけられた世界を現していた。これらの理想の多くは、博覧会の中で具体的な形を持って(あるいは、少なくともその模型として)

見られることが出来たのだ。」(Benedict 1983: 2)

博覧会やオリンピックにおける「見られる」対象は、やがて商品や芸術だけでなく、新時代に発見され国家に包摂されたばかりの人々をも、その中に含んでゆくことになる。本論文では、一九〇四年のセントルイス世界博覧会期間中に行われた第三回セントルイス・オリンピック大会において、人類学展示などに訪れていた先住民だけで行われた、アンソロポロジー・デイ（人類学の日）とよばれる競技を取りあげる。万国博覧会とオリンピックは、一九一〇年代以降になると、国家や民族のための儀礼的要素を多く含んだ、祝祭空間として変質していった。しかし、これらが祭典や儀礼へと確立する以前の、スペクタクルとしてのオリンピックは、現代のオリンピックからは想像できないような、「遠心的で、拡散的で、入り込む隙の多い」時空を生み出していたはずである。(マカルーン 一九八八 a) そのオリンピックは同時に、様々な社会が接触するコンタクト・ゾーンを形成していた。(Clifford 1997)

このようなコンタクト・ゾーンとしての近代オリンピックが、スペクタクルとしての性格を併せ持っていた、一九〇四年のセントルイス・オリンピックにおけるアンソロポロジー・デイには、博覧会の人類学展示に参加していた四人のアイヌ成人男性が参加した。本論文では、西欧社会と先住民が初めて接触した、特異なオリンピック競技の実体を明らかにすると共に、「歴史なき人々」によるオリンピックの、現代における解釈と評価の問題についても考察する。

第1章 セントルイス世界博覧会

米国で開催された初期の博覧会の多くは、記念行事的な性格を持っていた。また、一八五一年のロンドン万国博覧会の水晶宮や、一八八九年のパリ万国博覧会のエッフェル塔に見られるような、建築技術を駆使した先端的建築物とは対照的に、米国での展示館はギリシャ・ローマのような古風にデザインされた建築物が主流になっていた。このように、米国で開かれた博覧会は、

欧州における博覧会とは多くの点で異なっていた。しかし、これらの初期の世界博覧会が開催国家の統合を確認し、国家を生み出した白人の優越性と、多くの植民地を擁する帝国主義の成果を強調する点では、欧州と米国の博覧会は同様だった。(Rydel 1992: 6)

そのような米国の博覧会の中で、一九〇四年にセントルイスで行われたルイジアナ割譲記念万国博覧会 (Louisiana Purchase International Exposition) は、典型的な博覧会だったといえる。米西戦争、日清戦争、ボーア戦争などの直後に行われたセントルイス博覧会は、米国や日本といった世界史上に登場した新興帝国主義国家が、その軍事的勝利を記念し、展示物や、メディアを通してその成果を世界中に示すという、歴史的結節点としての意味をもっていた。(Benedict 1983)

当時、全米第四の大都市であり、シカゴと並ぶ西部の中心都市であったセントルイスでの博覧会では、それまでのどの都市をもしのぐ広大な敷地に、教育、芸術、科学といった、「文明」の成果に関する一六の展示をはじめ、農業、工業、漁業などの「自然」に関連する部門の展示が並べられた。そして、約六ヶ月の開催期間中に二千万人近くもの観客を集めた。

このセントルイス博覧会に、日本は一九〇〇年のパリ万博に次ぐ八〇万円の経費を計上して参加した。(Hotta-Lister 1999: 222) ハリスによれば、日本にとっての一九〇四年のセントルイス博覧会は、初期の博覧会での西欧文化とは異質のアジアの新興国家の文化を紹介するという啓蒙的段階を終え、日本の軍事的・経済的成功を積極的に世界にアピールする場となった。そのため、日本の博覧会への参加努力は、諸外国をはるかにしのいでいた。(Harris 1975) そのような博覧会に、九名のアイヌと、チセ (アイヌの住居) を始めとする生活空間が、米国の人類学者フレデリック・スターと牧師のパチェラーの協力によって、ほとんどそのままの形で、北海道からはるばる太平洋を渡ってセントルイスに持ち込まれた。(Starr 1904)^(註1)

第2章 セントルイス・オリンピック大会とアンソロポロジー・デイ

一九〇四年に、セントルイス世界博覧会（St. Louis World's Fair）と並行して行われたセントルイス・オリンピック大会は、近代オリンピックの歴史の中で、もっとも風変わりな大会だったといわれる。第一回のアテネ、第二回のパリに次いで行われた、第三回のオリンピック大会は、シカゴと開催をめぐって争ったセントルイスが、パリに次いで万国博覧会とオリンピックを併催することで決着した。

国際オリンピック委員会（IOC）によると、このオリンピック大会は、博覧会開催中の七月一日から十一月二三日までの約五ヶ月間開催され、一二ヶ国から五五四人あるいは六八七人の選手が参加した。（『近代オリンピックの歩み』 一九九四：八一：Wallechinsky 1992: xi）しかし別の資料によれば、さらに数多くの競技が行われ、約九千人もの人々が参加したという。（Henry 1976: 53）また、開催期間も、五月一四日から十一月一八日までの六ヶ月あまりの長期間で参加国も一部異なっている。（Mallon 1999: 23, 30-31）このような、資料による参加者や開催期間の大きな違いは、「オリンピック」として行われた競技があまりにも広範で、何を正式のオリンピック種目とするかについての見解が、資料ごとに異なるからにほかならない。クーベルタンはのちに、一九〇四年のセントルイス・オリンピック大会について次のように述べている。

「アメリカ以外のどこも、このようなイベントをプログラムに加えることなどしなかっただろう。しかし、アメリカ人にとっては全てが許されるのであり、それは、もし偶然にでも、歓喜する古代ギリシャの観客の中に自分たちを置くことが出来れば、古代ギリシャの先人のような放埒さを求める、若さ故の豊穡さなのだ。」（Henry 1976: 57）

しかし、このほかにも、セントルイス大会には、現代のオリンピック競技と大きく異なる点があった。このオリンピック大会には、ほとんど IOC 委員が参加しなかっただけでなく、のちに詳しく述べるように、現代におけるような正式の「公式オリンピック記録」が出版されなかった。そして、オリンピック終了後には、多数の競技中のどの競技を公式競技とするかについて IOC が招集されたはずだが、実際に開催されたかどうかについての記録すら残っていない。(Mallon 1999: ix) これらのことが、この風変わりなオリンピックを、現代において評価することの難しさに繋がっている。

このオリンピック大会では、オリンピック史上で類のない一つの競技がおこなわれた。それは、一九〇四年の八月一二日と一三日に行われた「アンソロロジー・デイ」(人類学の日)と呼ばれる競技だった。この競技に参加したのは、ほとんどが博覧会の人類学展示や、植民地になったばかりのフィリピン展示のために来ていた、先住民の成人男性だった。そして、アンソロボ



アーチェリーに参加したアイヌのサンゲア
(Sullivan 1905 : 260)

ロジー・デイには、クトロゲ (Kuto Roz, Koutourokee 三九歳), ゴロ (Goro 二六歳), オオサワ (Oshawa, Osawa 二三歳), サンゲア (Sangea 五七歳) の四人のアイヌ男性が参加した。^(註2) このアイヌが参加したアンソロポロジー・デイについては、ライデル (Rydell 1984; 166), カールソン (Carlson 1989), 小澤 (小澤 一九九四), 山口 (山口 一九九五), 上村 (上村 二〇〇一) などによって取りあげられている。しかし、これまでの研究は、セントルイス博覧会の一部として取りあげるため記述が断片的だったり、資料的な誤りを含んだり、二次資料の利用による不正確な点を多く含んでいる。このため、本稿では、可能な限りの一次資料をもとにすることによって、この「特異な」オリンピック競技の実態を明らかにしてゆく。

一九〇四年セントルイス・オリンピック大会の開催直前に発表された仮プログラムには、五月一四日から十一月二四日までに行われる予定の各競技について詳細に記載されている。しかし、このプログラムにはアンソロポロジー・デイについては何も記載されず、「他の世界選手権競技が時に応じて追加される」と、競技の追加がありうることだけが書かれている。また、このプログラムの「身体の訓練」と題された章では、アンソロポメトリー (人体測定学) の一環として子供達の運動競技によって身体訓練の方法や道具を示すことに加えて、世界各国の国民スポーツの比較によって、「文明における進化の指標」としての運動競技を解釈することへの期待が述べられている。(Preliminary Program 1904: 4-6) 具体的なアンソロポロジー・デイの運動競技について言及される、最初の出版資料と考えられるのは、一九〇四年八月発行の『万国博覧会報告』(World's Fair Bulletin) だ。この報告書は、セントルイス万国博覧会の開催前後に月刊で発行され、多くの記録や写真が含まれているが、そこにはつぎのように書かれている。

「運動競技イベントが八月一六日に世界博覧会で行われる。多くの人種の運動選手が参加する、非常に興味ある運動イベントが、人類学部門長であるマクギー博士と、身体文化部門長であるサリバン教授の共同で計画されている。それは、八月始めに万国博覧会会場のスタジアムで行われ、身体

文化部門の主催で、博覧会の奇妙な人々のすべて部族の代表が参加して行われることになっている。

その夕べは、科学的立場から非常に重要なものとなるだろうし、これまでそれ程多くの異なった人間の種族が一堂に集まったことはなく、世界史上でも比肩するものがないだろう。この偉大な人種間運動競技には、パタゴニア人、フィリピン人、アイヌ、アフリカ・ピグミー、コンゴ先住民、ココパ・インディアン、アラスカ・インディアン、ボウニー、ウイチタ、アラパホ、スー、キカプー、ピマ、マリコパなどが参加する予定である。また、日本人、中国人、東インド人、セイロン人その他の博覧会を代表する人々を参加させる努力が行われている。(中略)この競技は当初七月八日と九日に開催が予定されていたが、この試みが、より入念なものとして実行できるように、夏の終わりに延期された。延期のもう一つの理由は、先日の大雨によって、インディアンの野外での運動が出来なくなり、やる気をなくしたためである。」(World's Fair Bulletin; August 1904: 56)

この資料において特に興味深いのは、この開催計画が、人類学展示のために来ていた世界各地の「未開」人種だけでなく、博覧会に参加していた日本人、中国人、東インド人、セイロン人などの、「文明化された」非西欧人をも含んで行われる、非西欧人全体のための「人種間競技」として予定されていた点だろう。しかし、「アイヌと日本人を同一」に見られることを拒否する日本人などが、この人種間競技に参加するはずもなかった。結果的に、このアンソロポロジー・デイは、西欧人からも、「文明化」した非西欧人からも、「未開の」他者として分類された人々だけによる、「人種間」運動競技となったのだ。

第3章 アンソロポロジー・デイとアイヌ

アンソロポロジー・デイでは、徒競走、投擲、幅跳び、棒登り、アーチェリー、綱引きなど、合計一八種類の競技が行われた。参加したのは、南米の

パタゴニア、フィリピンのもろ、日本のアイヌ、アフリカのピグミー、バクバ、そして、アメリカ・インディアンのココパ、スー、ポウニー、チベツ、クロウ、ロック・リバーなどだったが、これらの人類学展示のために来ていた人々のほかにも、ユソフ・ハナ、マルーフ・ザイタウンというベイルートから来た二人のシリア人が参加したという記録が残っている。^(註3) アンソロポロジー・デいの初日は、いくつかの種目について各部族内での選抜を行うことに向けられた。二日目は、各部族内で一位と二位になったものだけが参加して、「部族間」の対抗競技が行われた。しかし、棒登りを除く各種目での結果は、「未開人」は「文明人」を遙かにしのぐ特別に高い運動能力を持っている筈だという予想に反して、白人の記録にはるかに及ばず観衆を失望させた。これに対して人類学者のマクギーは、運動能力が低いという競技結果は、参加者がスポーツを見たことも教えられたこともないためで、専門的な訓練者につけば、短期間にアメリカ人と同様の能力を持つだろうと述べている。(Sullivan 1905: 257) これは、世界中のどのような「人種」も、教育や訓練によって文明化すれば、西欧人と同様の能力を持てるようになる筈だという、当時の啓蒙主義的世界観を示している。

参加した四人のアイヌは、一六ポンド投げ、幅跳び、野球投げ、槍投げ、アーチェリーの五種目に「アイヌ」として参加した。(Sullivan 1905: 259-263) これらのアイヌ参加者について、競技委員長のサリバンは、アンソロポロジー・デいに参加した他の「未開人」の多くが、競技に全力を尽くさないことを嘆いたあとで、次のように述べている。

「日本北部から来た非常に少数の部族であるアイヌは、疑いもなく筆者が会った『未開人』の中で、もっとも、非常に礼儀正しい人々である。彼らは嬉々として愛想がよく、審判だけでなく誰にでも挨拶をするし、依頼されたスポーツには何でも参加する。しかし、それが好結果をもたらしたかどうかは疑問だ。アイヌの一人は、跳躍に興味を持ち跳ぼうと努力したのに、うまくは出来なかった。」(Sullivan 1905: 257)

しかし、徒競走や跳躍では良い成績を残さなかったアイヌも、アーチェリーではサンゲアが二位に、槍投げではクトロゲが三位に入るという好成績を残した。(Sullivan 1905: 259-263)

第4章 アイヌの入賞と褒賞

これらのアイヌの入賞について、上村はアイヌの参加者「サンゲア」が「銀メダルを獲得した」としている。(上村 二〇〇一：三一)しかし、当時のアンソロポロジー・デイの資料には、入賞者に対してメダルが贈られたという記録は見られない。では、アンソロポロジー・デイでは入賞者に何が与えられたのだろうか。セントルイス公共図書館の博覧会新聞記事ファイルには、次のような入賞者に与えられた賞についての記事が見られる。

「勝利者には、優勝杯や金メダルの代わりに賞金を与えられることが決められた。その賞金は各部族の担当者に戻され、各勝者はその賞金で心から欲しいものを買うことが許される。この決定は、ある部族には現金以外の賞が受け入れられても、他の部族には受け入れられないかもしれないという理由によってなされたものだ。(未開部族担当の)シムズ博士によると、競技は二つの理由で計画された。第一には、訪問者に未開人によって行われる競技スポーツを楽しむ機会を与えること。さらには、科学が、未開のスポーツと生活の多くに関して研究する事を可能にする為である。(中略)科学者は、野蛮なスポーツマンを比較し、来るべき世界の競技者間でどのように分類して適応できるかを推測する。」(St. Louis Public library, Universal Exposition N. P. Vol. 12 p. 137, St. Louis Republic Aug. 11, 1904)

またこの記事は、競技に参加することに消極的だった「ピグミー族」には、欲しいだけの西瓜を、棒登りなどの賞品として与えることが約束されたとのべている。このほかにも、『万国博覧会報告』の一九〇四年九月号は、アンソ

ロポロジー・デイの賞金について、つぎのように書いている。

「競技後、勝利者たちは身体文化館に連れてゆかれ、それぞれの賞を与えられたが、すべて現金だった。すべての一位の勝利者には三ドル，二位には三ドル，そして三位には一ドルが与えられた。」(World's Fair Bulletin; Sept. 1904: 50)

このオリンピック大会では、ほとんどの競技で現代のオリンピックのように入賞者にメダルが与えられていた。だが一方で、アマチュアリズムは当時のオリンピック参加にとっての絶対条件ではなく、入賞者への現金授与も異例なことではなかった。アンソロポロジー・デイだけでなく、白人だけが参加した他の競技でも、メダルの代わりに賞金が与えられていた。たとえばサイクリング競技では、アマチュアの入勝者が金・銀・銅のメダルとカップを貰ったのに対して、プロでは優勝者に五〇ドルの賞金が与えられている。(Olympic Games Daily Official Program, National Amateur Championships of the National Cycling Association 1904) また、前回の第二回パリ大会では、陸上競技をはじめとする多くの競技に賞金が与えられていた。(『近代オリンピック 100 年の歩み』)

アンソロポロジー・デイの優勝者に与えられた三ドルの賞金金額は、プロのサイクリング競技にはるかに及ばないが、入賞者へ与えられたメダルと賞金の違いは、競技主催者の人種的差別意識や、行われた競技そのものの性格(白人競技か非白人競技か)によって決められたのではなく、受け取る側の参加者自身の嗜好や要求によって決められたといつてよいだろう。このことは、オリンピック以外にも、優秀展示部門としてモロ族やイゴロットに金メダルが贈られた事例があることから理解できる。(Bennett 1905: 476) また、博覧会閉幕六週間前には、マクギーに「部門展示，米国，民族学分野」で金賞を授与され、アイヌの稲垣には副賞の銀メダル，サンゲヤには銅メダルが授与された。(VanStone 1993: 87) このように、非白人である先住民へのメダルの授与そのものが否定されていたわけではない。

人類学展示に参加していた先住民の間には、優勝杯や金メダルを必要としない人々がいたため、欲しいものが何でも購入することが出来る賞金が代わりに与えられた。西欧社会と先住民が接触するコンタクト・ゾーンとしてのアンソロポロジー・デイで、競技への参加という労働の対価となったのが、メダルやトロフィーではなく、現金や西瓜であったことは興味深い。それは、アイヌをはじめとする多くの先住民参加者にとって、「想像の共同体」としての「国家」や「民族」、あるいは「文化」という概念をメダルやトロフィーによって象徴させるという、近代における提喻法のレトリックを用いる必要が、まだなかったからである。(宮武 二〇〇〇：五一)

ところで、セントルイス博における人類学展示の写真集である、ブレイトバートの『世界の展示』には、足に毛皮を巻き、アメリカ国旗と日よけの傘を持ったネグリト族の若者の写真が紹介されている。その写真についてブレ



星条旗を持ち、毛皮のひざあてをした
ネグリト族

(Breitbart 1997: 59)



棒登り競技に優勝したネグリト族
(Sullivan 1905: 248)

イトバートはつぎのように書いている。

「セントルイスの一九〇四年オリンピックでは、非白人は参加を許されていなかったの、八月の最中に別の運動競技会が開かれた。呼び物となったのは、競走、高跳び、やり投げやアーチェリーなどだったが、それらは博覧会の『土人達』にとって代表的な種目と共に行われたものだった。それらは、運動競技としての性格を持っただけでなく、人類学者に白人と非白人の間の運動能力の比較をする研究機会を与えるものだった。オリンピックの『通常』競技の勝利者には金メダルが与えられたのに対して、人類学デーの勝利者には、アメリカの国旗が与えられた。」

そしてブレイトバートは、このネグリト族の若者が持ったアメリカ国旗が、メダルの代わりにオリンピックの賞品として貰ったものである根拠として、撮影者のビールズによる「走りやすくするのに、野生イノシシの毛皮を足につけたネグリト族」という説明文を挙げている。(Breitbart 1997: 58-59)^(註4)しかし、セントルイス・オリンピックのアンソロポロジー・デイの資料には、走ることが必要な競技種目でネグリト族が三位以内に入った記録はない。唯一ネグリト族が参加しているのは棒登り競技だけであり、これに参加したバシリオとサヤスという二人のネグリト族が、一位と三位に入った記録が残されているだけだ。そして、残されたオリンピックの棒登り競技の写真を見ると、ネグリト族は木登りの膝当てに毛皮をつけているようにも見える。(Sullivan 1905, Mallon 1999)

先に述べたように、アンソロポロジー・デイの入賞者には現金が贈られている。このため、この写真のネグリト族は、オリンピックに参加した者でなく、単に足に毛皮をつけて星条旗と雨傘を持って撮影したものであるか、仮に写真のネグリト族がオリンピックの棒登り競技の入賞者であったとすれば、写真の星条旗と日傘は、ネグリト族優勝者自身が三ドルの賞金を使って「心から望んで」手に入れた「文明の象徴」になるだろう。

あるいは、写真のネグリト族はオリンピック以外の競技に参加していたと

も考えられる。小澤もまた「万博の戦争部門のなかの人類学セクションの局長を務めていたアルバート・W・ジェンクスが、それぞれの競技の勝者にトロフィーとしてアメリカの国旗を授与している」と述べている。(小澤 一九九四：四二) この根拠としているのは、ライデルの『世界全部が博覧会』だが、ライデルは、オリンピックの一部として行われたアンソロポロジー・デイと、博覧会中に行われた他のスポーツ競技を混同していると考えられる。(Rydell 1984; 166-167) ライデルと小澤が述べている勝者へのアメリカ国旗の授与についての資料は、「モロ族がトラック上でのフィリピン先住民の競技大会に勝利する」という九月一六日の新聞記事だろう。(Rydell 1984; 174) しかし、この記事は八月一二・一三日のアンソロポロジー・デイ終了後の記事で、フィリピン先住民だけの競技が後日行われたことを示唆している。またライデルによれば、マクギーは不評だったアンソロポロジー・デイとは別に、「人類学競技会 (anthropology meet)」と呼ばれる競技会を九月に行うことを企画し、その競技は三万人もの観衆を集めて成功裏に行われた。これらの競技会が、米国によって植民地化されたばかりのフィリピン先住民や、アメリカ・インディアンによる競技だったとすれば、それらの勝利者に、「母国」となったアメリカ国旗が与えられたとしても不思議はない。^(註5)

ブレイトバートは、「西欧社会」と「非西欧社会」、あるいは「文明」と「未開」の二分法を象徴的に示すものとして、星条旗と毛皮を対比させ、万国博覧会やオリンピックにおける植民地主義と人種主義の「まなざし」を象徴的に紹介しようとした。しかし当時の資料から、具体的な植民地統治の意図を超える、「未開」と「文明」を対比させる明確な社会進化論や、人種主義イデオロギーを読みとることは困難だろう。むしろブレイトバートをはじめとする研究者の視点は、二〇世紀後半の「未開」と「文明」、あるいは筆者が以前に紹介したような、ラトゥールの近代が生み出した「翻訳」の実践によって生み出された虚構でしかない。(宮武 二〇〇〇)多くの近代主義者は、あらゆる事象に「文明」と「未開」、「西欧」と「非西欧」のまなざしを発見しようとする。しかし、二〇世紀初頭に行われたコンタクト・ゾーンとしてのセントルイス博覧会やオリンピックには、そのような近代の枠組みや概念に

よって包摂しきれない未分化でハイブリッドな部分が多く含まれている。人類学者も、博覧会やオリンピック企画者も、そして先住民自身も、まだ近代という大きな物語に完全には呑み込まれなかった時代だったと言えるだろう。そのような時代を、近代のパラダイムを通して見ることは、ホイッグ史観にほかならない。

第5章 アンソロポロジー・デイの現代における評価

アンソロポロジー・デイの競技を「公式」のオリンピック競技に含めるかどうかについては、多くの異論がある。セントルイス・オリンピックの監督(Director)で、博覧会の身体文化部門長だったサリバンの編集による、『スポルディング公式運動年鑑一九〇五年版』は、オリンピック特別号として、「一九〇四年オリンピック競技公式記録」を掲載している。(Sullivan 1905) この「公式記録」は、副題に「未開部族のみの競技者による、初めての運動競技についての報告を含む、世界博覧会アンソロポロジー・デイの公式記録」とわざわざ付記しているように、アンソロポロジー・デイで行われた詳細な競技記録を含んでいる。上村は、この資料を「公式」記録だとしている。(上村 二〇〇一：三〇) しかし、この「公式記録」をもとに、アンソロポロジー・デイを公式のオリンピック競技記録に含めることには問題がある。なぜなら、サリバンはこの「公式記録」に、オリンピック競技期間中に行われたすべての競技を無条件に含めてしまっている。また、この「公式記録」は、米国におけるセントルイス・オリンピックの「公式記録」ではあっても、国際的なオリンピック記録とするかについて、多くの検討の余地が残されている。その理由の一つは、当時発行された資料においてさえ、競技種目について異なった記述がされているからである。サリバンの「公式記録」と同じ一九〇五年に出版された、ルーカスによるセントルイス・オリンピックの記録である、『オリンピック競技 一九〇四』では、アンソロポロジー・デイについて全く触れられていない。(Lucas 1905) また、一九〇五年の『ルイジアナ割譲記念博覧会の歴史』には、オリンピック大会についての詳しい記録が見られるが、

そこでは、「オリンピック競技 (Olympic games)」と「オリンピック種目 (Olympic events)」に大きく分けられ、アンソロポロジー・デイは「オリンピック種目」に含まれている。(Bennett 1905: 565-573) この「競技」に含まれるものを正式のオリンピック競技、「種目」に含まれるものを非公式の競技と考えることも可能かもしれない。しかし、この資料では「競技」と「種目」を区別し分類する条件や定義が明確ではなく、この資料も、アンソロポロジー・デイを正式種目とするかについての判断に利用できない。

近代オリンピック史を研究するマロンによれば、国際オリンピック委員会は一九〇〇年のパリ大会と同様に、セントルイス大会においても、どの種目と競技を「正式」のものと認めるかについて、公式に決定することがなかった。そのため、セントルイス大会のような、公式記録が作られる以前のオリンピック競技について、どの競技を「公式」のものとするかについての判断は、現代の歴史家と関係者に委ねられている。そしてマロンは、一八九四年から一九〇三年までに IOC で公式に議論された基準をもとにした、一九九〇年代のオリンピックの競技原則と、創始者であるクーベルタンのオリンピック精神をもとに、次のような基準によってセントルイス・オリンピックにおける「公式」種目を選定している。(Mallon 1999: 12-16)

- (1) クーベルタンがオリンピックは国際競技であると強く願ったように、競技が国際的であること。これにより、大学対抗などの米国内だけの競技は公式種目から除かれる。
- (2) 一九〇四年までに IOC は、より「早く・高く・強く」というモットーを採用し、オリンピックは最良の運動選手の競技であるとしていた。このため、ハンディキャップ競技は除外される。
- (3) クーベルタンは、アマチュアであること以外は、いかなる制約も設けなかった。そのため、年齢制限や、アイルランド人などの人種的限定を設けた競技は除かれる。
- (4) アマチュアであることに対して、当時は例外としてフェンシングへのプロ選手の参加が認められていた。(セントルイス大会のフェンシング競技に

は、プロ選手の参加はなかった。)

マロンは、これらの条件によって、セントルイスで行われたすべての競技について、オリンピックと認められるかどうかを判定している。そして、アンソロポロジー・デイは、(1)国際的であり(2)ハンディキャップ競技ではなく(4)アマチュア競技である点では正式種目の基準を満たすが、(3)「先住民」だけしか参加できないように、制限が設けられている点から、オリンピック競技 (Olympic Games) に含めていない。(Mallon 1999: 14)

マロンと同様に、現代のオリンピックに関する歴史資料の中で、一九〇四年のセントルイス大会におけるアンソロポロジー・デイを、公式のオリンピック競技記録に含んでいるものは見られない。日本オリンピック委員会が企画・監修している『近代オリンピック 100 年の歩み』には、一九〇四年の第三回セントルイス大会の「人類学の日」(アンソロポロジー・デイ)について、つぎのように書かれている。

「IOC のデータによると、開催期間は 7 月 1 日から 11 月 23 日までの 5 ヶ月弱。12 ヶ国から 554 人の選手が参加したとされている。開催期間が長いのは、前回のパリ大会と同じように博覧会の付属物となってしまったためだ。18 競技 95 種目とは別に、『人類学の日』との名前のもとに、アメリカ・インディアン、アフリカン・ピグミー、ニグロ、パタゴニア人、アイヌ人、モロー族などの原住民を対象とした競技もこの期間中に実施している。」(『近代オリンピックの歩み』 一九九四：八一)

そして、当然のようにアイヌ選手の記録はどこにも見られない。しかし、先に述べたように、セントルイス・オリンピックで「18 競技 95 種目」から「原住民を対象にした競技」を区別し、ほかの競技と「別に」する実証的で合理的な理由は見あたらない。先に紹介した『万国博覧会報告』に書かれていたように、このアンソロポロジー・デイは、当初は人類学展示の参加者だけでなく、和人の日本人や中国人の参加も含めて期待されていたのであり、ここ

で「原住民を対象にした競技」と呼んでいるものは、日本人を含むすべての非白人を対象に開かれたものに他ならなかった。二〇世紀初めの和人である「日本人」が、自分たちを白人と同等の位置に置くことを期待しても、白人にとっては「和人」も「アイヌ」も、同じアジアにおける非白人の他者であり、同じ領域に含まれるべき「原住民」だったのだ。

『近代オリンピック 100 年の歩み』で書かれているように「原住民」を対象にしていることが、あるいはマロンのように、アンソロポロジー・デイには、「先住民」だけしか参加できないように参加資格に制限が設けられている点を、オリンピック競技でない理由として挙げるなら、その参加資格を白人のみのクラブや組織単位に限定して、非白人の参加が実質的に制限されていた、「本体」のオリンピック競技自体が「正式競技」といえなくなるだろう。

さらに、現代のように国内あるいは国際的なオリンピック組織の承認を得ていないことも、オリンピック記録からアンソロポロジー・デイを排除する理由にはならない。国家単位の参加を前提にしている現代のオリンピック大会は、個人やクラブ単位での参加から、各国内オリンピック委員会ごとの参加手続を行うように変更し、開会式には国旗を先頭に入場行進することが決まった一九〇八年のロンドン大会に始まった。そして各国が勝手に主張する国家単位でなく、「IOC が認めた国内オリンピック委員会 (NOC) だけがオリンピックに参加する資格を有する」と決めた、一九一二年のストックホルム大会において確立されたのだ。これらの点から、アンソロポロジー・デイのアイヌを、最初にオリンピックに参加した「日本人」と考えるのが妥当ではないだろうか。

ところで、日本における公式参加の記録は、加納治五郎を役員としてナショナルチームが最初に参加した、一九一二年の第五回ストックホルム・オリンピック大会に始まる。嘉納は一九〇九年五月にベルリンで開催された IOC 総会で、アジアで最初の IOC 委員に任命された。そして翌年には、一九一二年にストックホルムで開催されるオリンピックへの招請状が、駐日スウェーデン公使を通して嘉納のもとに届けられる。そこで、明治四四年には嘉納を会長とする大日本体育協会が設立され、オリンピックの予選会が一一月に参加

者九一人によって行われた。その結果、日本で最初のオリンピック代表団は、役員加納治五郎と監督として大森兵蔵、選手として短距離の三島弥彦（東京帝国大学）とマラソンの金森四三（東京高等師範学校）が選ばれた。（加藤 一九六四）『近代オリンピック 100 年の歩み』には、「歴代オリンピック参加日本代表選手団名簿」の最初に、「1912 年・第五回ストックホルム大会、役員 加納治五郎、大森兵蔵、陸上競技 三島弥彦（東大）、金森四三（東京高師）」が記載されている。

おわりに

セントルイス・オリンピックに採用された競技種目のなかで、現代のオリンピックに含まれていないのは、アンソロポロジー・デイで行われたような先住民の競技ではなかった。このオリンピックでは、サイクリング競技へのプロ選手の参加や、大学の運動クラブだけの競技、あるいは一三歳の生徒を始めとする少年達だけの競技、ハンディキャップ競技などが、それぞれ独自のプログラムとして組まれて行われた。つまり、現代ではオリンピックとは異なった競技として組織が構成され実施されている、プロ選手による競技、大学生だけが競い合う競技、一三・一四歳の少年達による子供だけの競技、さらにはハンディキャップ競技、そして現代では伝統文化として演じられるような先住民の技が、一つの競技場でオリンピック競技として行われていたのだ。さらに、アーチェリーでは女性だけの競技が行われ、米国のリダ・ハウエルが金メダルを受けている。（Mallon 1999: 19）また、このオリンピック大会では、娯楽ゾーンのパイクで行われていた、ボーア戦争での戦闘再現のために南アフリカから来ていた、レン・タウトヤン・マシアニという二人の選手がマラソン競技に飛び入り参加し、それぞれ九位と一二位となった。このことで、セントルイス・オリンピック大会は、黒人選手が参加することができた最初のオリンピック大会ともなった。（Mallon 1999: 57, Wallechinsky 1992: Fig. 33）

セントルイス・オリンピックは確かに現代の目から見ると、奇異に映るか

もしれない。それは先に述べたように、セントルイス・オリンピックがほとんどすべてを包摂する広がりを持ち、そこから排除されている社会領域がほとんど無い点にあるのだろう。現代のオリンピックを始めとする様々なスポーツ・イベントは、プロとアマ、成人と子供、学生と社会人、健常者と身体障害者、国際スポーツと民族文化などによって多くの社会領域を分類・定義し、異なった領域へと配置する一方で、そこに分類され定義されないものを互いに排除して成立している。しかし二〇世紀初頭のオリンピックは、帝国主義と植民地主義を支えた人種理論に彩られていたとはいえ、多くの人々を一つの世界規模でのスペクタクルの中に包摂するだけの、規模の大きさと異種混合を許すだけの普遍主義的な受容性を持っていた。アンソロポロジー・デイは「人種差別的」「社会進化論的」「見世物的」だと多くの批判にさらされてきた。しかし裏返せば、オリンピックであるような競技が開催されたことは、現代では決して存在することのない、祝祭やスペクタクルとしての場所と空間を、オリンピックという生まれたばかりの装置が実現していた事を意味している。それは誰もが接触することのできるコンタクト・エリアであり、誰もが参加できるパブリック・ドメインでもあったのだ。(Hajer and Reijndorp: 2001) 筆者は先に、一つの広い概念領域に含まれていた伝統社会の技術領域が、二〇世紀のはじめには科学と文化という、近代を規定する二つの支配的パラダイムによって引き裂かれていったことを示した。(宮武二〇〇〇) この一九〇四年のオリンピックにおいても、さまざまなスポーツ競技が分類され排除されることなく、一つの身体技術、あるいは身体文化として広い一つの領域に包摂されていたといえるだろう。しかし、やがてこのような身体技術の領域は次第に細分化され、儀礼化され、スペクタクルは祭典へと変質してゆく。そこでは、多くのスポーツ競技が数値や計測による科学的運動競技の領域へと包摂される一方で、他方では国民の優秀性を競い合う一九三六年のベルリン・オリンピックを頂点とする、国民国家を彩る「民族の祭典」と、「美の祭典」へと変容してゆくのだ。(マカルーン 一九八八 a, 一九八八 b)

注

- (注1) セントルイス博覧会をはじめとする、初期の博覧会へのアイヌの参加についての詳しい分析は、別稿に譲りたい。
- (注2) 参加したアイヌの年齢は、資料により異なるが、最も正確だと考えられる (Francis 1913) による。
- (注3) もし、アンソロポロジー・デイが正式のオリンピック種目に含まれるとすれば、これらの二人は、モロ族の参加者とともに、近代オリンピック競技に参加した最初のイスラーム教徒だろう。
- (注4) セントルイス博覧会の公式写真家であったビールズ (Jessie Tarbox Beals) は、米国における最初の女性フォト・ジャーナリストの一人として知られている。(Mathe 1998)
- (注5) ライデルによれば、この「人類学競技会」では賞金を与えることが差し控えられた。(Rydell 1984; 167) このことも、星条旗の授与が、アンソロポロジー・デイとは異なった競技だったことを示している。

参考文献

- 上村英明 二〇〇一「近代オリンピックと先住民族」『先住民族の『近代史』—植民地主義を超えるために』平凡社
- 小澤英二 一九九四「万国博覧会とオリンピック大会—1904年セントルイス大会での『人類学の日』をめぐって—」『椋山女学園研究論集』第二五号 (人文科学篇) 三五—四五頁
- 加藤仁平 一九六四 新体育学講座 第三五巻『嘉納治五郎』逍遙書店
- 富山一郎 一九九六「測定という技法；人種から国民へ」『江戸の思想』第四号，一一九—一二九頁 ペリカン社
- 日本オリンピック委員会 一九九四『近代オリンピック 100 年の歩み』ベースボールマガジン社
- マカルーン，ジョン・J.，一九八八 a 光延明洋訳「近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論」J.マカルーン編『世界を映す鏡—シャリバリ・カーニバル・オリンピック』平凡社
- マカルーン，ジョン・J.，一九八八 b 柴田元幸，菅原克也訳『オリンピックと近代：評伝クーペルタン』平凡社

- 宮武公夫 二〇〇〇『テクノロジーの人類学』岩波書店
山口昌男 一九九五『敗者の精神史』岩波書店
吉田光邦編 一九八六『万国博覧会の研究』思文閣出版
吉見俊哉 一九九二『博覧会の政治学—まなざしの近代』中公新書
Benedict, Burton 1983 “The Anthropology of World’s Fair; San Francisco’s Panama Pacific International Exposition of 1915” Scholar Press
Bennett, Mark, ed., 1905 “History of the Louisiana Purchase Exposition” Universal Exposition Publishing Co.
Breitbart, Eric 1997 “A World on Display: Photographs From the St.Louis World’s Fair 1904” University of New Mexico Press
Carlson, Lew 1989 ‘Giant Patagonians and Hairy Ainu: Anthropology Days at the 1904 St. Louis Olympics’ “Journal of American Culture” 12 (Fall) pp. 19-26
Christ, Carol 1996 ‘Japan’s Seven Acres; Politics and Aesthetics at the 1904 Louisiana Purchase Exposition’ “Gateway Heritage” Missouri Historical Society Vol. 17 No. 2 Fall, pp. 2-15
Christ, Carol Ann 2000 ‘The Sole Guardians of the Art Inheritance of Asia: Japan and China at the 1904 St. Louis World’s Fair’ “Position” Vol. 8: 3 pp. 675-709
Clifford, James 1997 “Routes” Harvard Univ. Press
Findling, J. E. and Pelle, K. D., eds., 1996 “Historical Dictionary of the Modern Olympic Movement” Greenwood Press
Francis, David R., 1913 “The Universal Exposition of 1904” Louisiana Purchase Exposition Co.
Fox, T. J., and Sneddeker, D. R., 1997 “From the Palaces to the Pike; Visions of the 1904 World’s Fair” Missouri Historical Society Press
Hajer, M and Reijndorp 2001 “In Search of New Public Domain” NAi publishers
Harris, Neil 1975 ‘All the World a Melting Pot? Japan at American Fairs, 1876-1904’ in Iriye, A., ed., “Mutual Images; Essays in American Japanese Relations” Harvard University Press
Henry, Bill 1981 “An Approved History of the Olympic Games” The Southern California Committee for the Olympic Games
Hotta-Lister, Ayako 1999 “The Japan-British Exhibition of 1910; Gateway to the Island Empire of the East” Japan Library
Latour, Bruno 1993 “We Have Never Been Modern” Harvard University Press
Lucas, Charles J. P. 1905 “The Olympic Games 1904” Woodward & Tiernan Printing Co.
Mallon, Bill 1999 “The 1904 Olympic Games; Results for All Competitors in All

- Events, with Commentary” McFarland
- Reid, R. A., Rau, W. H., 1904 “The Greatest of Expositions Completely Illustrated: Official Publication” Official Photographic Company of the Louisiana Purchase Exposition
- Rydell, R. W., 1984 “All the World’s a Fair; Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916” University of Chicago Press
- Rydell, R. W., 1992 “The Book of the Fairs; Materials about World’s Fairs, 1834-1916, in the Smithsonian Institution Libraries” American Library Association
- Rydell, R. W., Findling, J. E., and Pelle, K. D., 2000 “Fair America; World’s Fairs in the United States” Smithsonian Institution Press
- Roche Maurice 2000 “Mega-Events and Modernity: Olympic Games and Expos in the Growth of Global Culture” Routledge
- Starr, Frederick 1904 “The Ainu Group at the Saint Louis Exposition” The Open Court Publishing Company, Chicago
- Stevens, W. B., 1904 “The Forest City-1904” Thompson Publishing Co. (originally appeared as weekly serial from April 14 through November 3, 1904)
- Sullivan, J. E., ed., 1905 “Spolding’s Official Athletic Almanac” The American Sports Publishing Co.
- VanStone, James W., 1993 ‘The Ainu Group at Louisiana Purchase Exposition, 1904’ “Arctic Anthropology” Vol. 30, No. 2, pp. 77-91
- Wallechinsky, David 1992 “The Complete Book of the Olympics; 1992 Edition” Little, Brown
- Universal Exposition 1904 “Preliminary Programme of Physical Culture Olympic Games and World’s Championship Contests”